

令和7年7月3日

不祥事根絶に向けた本校の取り組みについて

近日のニュースや報道誌等で様々な学校関係者の不祥事が取り沙汰されています。関係する事件や事態にふれ、私たち教職員は、一様に心を痛め、落胆し、他人事と割り切れない想いを禁じ得ません。

今私たちは、不祥事の根絶に向けた強い決意を新たにしています。もちろん本校では個々の不祥事に係る原因の検証や、当事者意識の向上を目論んだ研修機会を継続してきましたし、今後も行っていきます。その上で、特にこれから重視していこうとしているのが、個々の不祥事事例に触れ、自分の家族のありように想いを重ね続ける営みを継続していくことです。家族の存在は、教職員個々が、自分の蛮行等でこの人を泣かせてはならないという自覚を最も強くします。私は校長として、本校から不祥事を一切出さない要の策を、「心のブレーキ」の強化と定期点検であるとししました。

「うちは大丈夫」、「この人に限って」と信じたい心情は、同業の家族を持つ者は皆同じです。しかし、現実には不祥事を起こした当事者は、日常的に素行不良であることもなく、日々の公務にきちんと向き合ってきた者が多いのも意外な事実です。つまり、本校の教職員にも、ふとした何か微細な誘惑や、理性の弛緩、急な落ち込みや怠惰など、不祥事の誘因がすり足のごとく忍び寄り、俗に言う「魔が差す」事態に至る可能性があるということを、これまでの事例から認識しなくてははいけません。

万が一教職員が不祥事等の誘因に遭遇し、AT車の惰性走行のようにのろのろと、悪事の沼地に没入してしまいそうな時、はっと家族の姿や声を思い出す対象、つまり「心のブレーキ」となることを、当人だけでなく、ご家族も巻き込んで再確認する機会を作っています。ことあるたびに私は教職員全員のご家族宛に手紙を書いています。一緒に暮らしておられるご家族なら、体調や表情がさえない、何か行動や言動等変化を感じたら、迷わず心配とねぎらいの言葉をかけていただきたいと伝えています。遠方に住まわれているご家族なら、「便りが無いのは元気な証拠」と思わず、この機会に、普段なかなか聞けなかった仕事ぶりや生活について、話題をもっていただきます。万が一、ご本人に魔が差す事態となっても、ご家族の顔が頭にうかび、つかの間の閻魔に身を投じることから守り、防ぐ人(プリベンター)となり、その存在が意識として根付いた教職員は、不祥事から最も縁遠くなるはずだと信じています。

本人を信じる以上に、ぜひご家族の支えとなる実際の言動をとっていただきたいという切なる願いをこれからも当人をおしてご家族にお願いをしていきますし、コンプライアンスに係る研修機会のたびに、その話を伝え続けていきます。

研修のための研修を漫然と続けることなく、どんな内容を探り上げたかをアピールして慢心せず、全ては結果だという強い自覚のもと、これからも自分、家族ともに「心のブレーキ」を強化、点検し続けていきます。

茨城県立盲学校長 大澤宏規